

ベンダーとの作業分担を見直して 運賃削減、店舗作業を効率化

東

京・多摩地区と北関東で店舗を展開する食品スーパー、株式会社エコス様（本社：東京都昭島市）の物流子会社、株式会社TSロジテック様（同）は2017年10月、「宇都宮物流センター」（栃木県宇都宮市）のドライ品（加工食品、飲料など）エリアに、自動仕分け装置「サーフィンソーター」を導入しました。これまでベンダーが行っていたドライ品の店舗別の仕分け作業を自社に取り込み、自動化を推進。カートラックへの積載効率を高めることでトラック運賃を削減するとともに、店側の荷受け・陳列作業の効率化にもつなげています。

1965年設立の株式会社エコス様は「エコス」「たいらや」「マスダ」の3ブランドで、計114店舗（2018年5月現在）のスーパーを展開しています。子会社の株式会社TSロジテック様が運営する物流センターはすべてTC（通過型）で、宇都宮、所沢（埼玉県）、三芳（同）、茨城、袖ヶ浦（千葉県）の5拠点が現在、稼働中です。

ドライ品は従来、ベンダーが店舗別に



ソーターで仕分けた商品は店舗別にカートラックに積み込み、完了すると出荷エリアへ横持ちする。

仕分けてカートラック（以下、台車）で各センターに納品し、センターで担当者がケース検品を行ってから方面別のトラックに振り分けて出荷していました。ただ、商品はカテゴリーごとに複数のベンダーからそれぞれ納品されるため、台車の



入荷ラインは4本。ベンダーでカテゴリー別に総量ピッキングした商品を投入する。

積載効率に課題を抱えていました。その結果、繁忙期には庫内が台車でいっぱいになることもあったそうです。さらに物量が多い日には、ベンダーのピッキングや店舗別仕分け、台車への積載作業に遅れが生じ、予定時間に入荷しないこともありました。

このため、2017年5月に所沢、同年10月には宇都宮と茨城の計3拠所にサーフィンソーターを導入。これらのセンターでは、ベンダーでカテゴリー別に総量ピッキングした商品をパレットでまとめて引き取り、店舗別仕分けと台車への積み込み作業を自社で行うように作業分担を見直して、従来の問題を解決したのです。

栃木・福島・茨城の39店舗に配送 繁忙期には18万~20万点を処理

宇都宮物流センターは2階建てで、

エコスグループの店舗数拡大と売り上げ増加のためには、それに即した物流体制の整備が必要不可欠です。競争が激化している地域もあり、物流コストをいっそう削減するため、当社も現在の延長線上ではなく、新たな工夫や技術を積極的に取り込んで、センターを運営していきたいと考えています。

代表取締役社長 久宗 圭一 様

延べ床面積は1万4,325㎡。庫内はドライ品とチルド品（日配品）のエリアに分かれており、24時間365日稼働しています。現在、栃木・福島・茨城県の計39店舗に商品を配送しており、ドライ品の取扱量はピース換算で1日約6万点、繁忙期には18万~20万点を処理しています。

ソーターの採用で、商品を効率的に台車へ積み込めるようになり、店舗へ配送するトラックの積載効率が向上。物流費の約半分を占める運送費を削減することができました。店舗に納品する台車が減ったことで、店側の荷受け・陳列作業も効率化しています。

積載効率の向上に伴いTSロジテックが保有する台車数を大幅に削減できたといった効果も上がっています。目視で行っていたケース検品も、ソーターで仕分けることで納品ミスを見逃しやすくなり、結果的に店舗への配送ミスが減少しました。



サーフィンソーターの全長は43m。リジェクトラインを含めて16シュートで構成され、最大4,000ケース/時を処理できる。